向日葵の声

尾ノ坂　駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
向日葵の声

【Ｎコード】
Ｎ７４７５Ｈ

【作者名】
尾ノ坂　駿介

【あらすじ】
私の元に現れた不思議な少女。それは、私が見た一夏の幻だったのかもしれない。

（前書き）

短編です。

止まることのない蝉時雨は、この夏空に似合う彼方への旋律だった。

じわじわと収まることのない真夏の気温は既に三〇度を超えた。酷く蒸し暑く湿気の漂う季節である。ぼうっと視界が歪んで見えてしまうのは、蜃気楼と呼べる物なのかどうかは分からない。

本当にこの地が温帯であるのを疑ってしまうほどの、じめじめとした嫌な暑さだ。遠く離れた乾燥帯にでも来てしまったのでは、と額から滴る汗を拭いながらも、そんな考えが洋介の脳裏を過ぎていく。麗らかな様子には変わりないのだが。

土を踏んで色褪せていく運動靴の底面は、既に熱を帯びていて熱くなり、一歩一歩前に足を動かすと同時に伝わる感度は知れたもの。

「暑いな……」

大きくため息をつき、汗で濡れて気持ちが悪いシャツを押さえながら、景観を見渡す。見えてくるのは、一面に広がる向日葵の花。黄色に彩られたその姿は、透明な青空に美しい曲線を描きながら咲

き誇っている。

向日葵畑を歩く人は洋介以外に誰もいない。優雅に咲き誇るそれは夏の風物詩と呼んでも過言ではなかった。

アスファルトで舗装されていない自然な砂利道を踏みしめながら、辺りに日陰はないのかとしきりに見回す。

しかし、見えてくるのは燦々と光り輝く太陽と、その光を浴びて生ぬるい風に揺らめいている向日葵のみ。

「全く、こうも向日葵ばかりの景色が続いていたら、目がおかしくなってくる」

一人、彼以外に誰もいない砂利道で突っ立ち、苦笑混じりの悪態をつく。

悪態をついたと雖(いえど)も、所詮は独り言の類にしか当てはまらないのだが。

どのくらい歩いたか、踏みしめる砂利道が少しだけ緩やかになったのが分かる。

そして、洋介が見つめる先にあるものは――砂利道の横に造られた、大きな休憩所。

茶の屋根に木目の入った古風なコテージのような造りで、楕円状に広がる椅子に、真ん中に大きく置かれたテーブルは既に色あせて、少々傷も入っていた。

「……助かった」

安堵のため息を漏らし、洋介は駆け足で休憩場まで急ぐ。

とにかく、今は日陰に入りたい。この直射日光に当たっているよりは、休憩所で休んでいた方が断然とマシなのだから。

背に掛けていたリュックサックをテーブルの上に置き、洋介は椅子に腰をかけた。幾許か日向より涼しいだけの場所も、先ほどからずっと太陽の光を浴び続けた彼にとっては、そこは最高の憩いの場所だった。

「父さんの家まで……後二キロか。参った。この辺は交通手段なんてないからな。出来れば夕方の間に到着したいんだが……」

徐に地図を広げ、独り言を呟く。まだまだ先は長い。この程度で根を上げていたら後が持たないぞと自分自身に喝を入れて、地図をしまった。

洋介が住んでいた都会から電車を使って一時間、そこからバスに乗り換えて郊外の、アスファルトが敷き詰められていない道路を通り、終点で降りる。後は向日葵畑に囲まれた道を一直線に突き進めば実家に辿り着くことが出来るのだが……。

「子供の頃は、この辺を余裕の表情で走り回っていたんだろうな。しかし……今となって懐かしいと思っていても、あの頃みたいに頑張ることは出来ないな」

上京するまでは、洋介はこの田舎で生活を営み、毎日を送ってい

た。幼少の時は仲の良い友達と一緒に蝉を取り、田んぼにいるザリガニやゲンゴロウを網で捕まえて遊ぶ毎日を送っていた。親の都合で田舎から都会へと引っ越すのが決まったのは、洋介が中学校に入学して間もない頃だった。幼馴染や友達と別れを告げ、必ず此処へ帰ってくると言ったのは、はたしていつだっただろうか――。

「あの……」

突然声をかけられ、感傷に浸りつつあった洋介の思考は即座に切り替わった。慌てて応対しようと声の主の方へ振り向いた洋介の目に映ったのは――大きな麦わら帽子を被った一四、五歳くらいの少女だった。ウエストに蒼色のリボンが結ばれた白いワンピースに、顔は麦わら帽子によって隠れて、あまり良くは見えないが、化粧っ気はなく、この猛暑で日焼けをしていない白い肌が目立っていた。

「あ、ああ。こんにちは。今日は暑いですね」

洋介がその少女に軽く会釈すると、彼女も小さく頭を下げ、彼の向かいに座った。一休みをするために此処まで歩いてきたのだろうか。気配を全く感じなかったのに洋介は少し動揺した。それほど自分は深く昔のことを考えていたのだろうか。

「何処かへ向かわれているのですか？」

洋介は尋ねた。

「……いえ、自分はただ、この周辺を当てもなく歩いているだけです。目的などありません」

「そうですか。……それにしても、今日も蝉が良く鳴いていますね」

膝の上で手を組み、洋介は未だミンミンと木のそばで鳴き続ける蝉たちを見詰めた。少女もその洋介の目線に合わせるように蝉たちを見詰め、ため息交じりの声で洋介にこう言った。

「蝉も、生きていますから。数年間地中の中で生活して、地上に出た時にはたった一週間、長くて一ヶ月程度しか生きられない。それでも尚、彼らは自らの命を燃やしながら、懸命に生きていますから……」

「……そうですよね。長い年月を経て、彼らは成虫となり、命を散らせていく。儚い命だと知って尚も鳴き続ける蝉たちは、雄弁に何かを伝えようとしているようで……。そう、思いませんか？」

「……さあ。私は蝉ではないので分かりません。ですが、蝉たちが輝いている瞬間が今だということは確かなのかもしれませんね。それも――である私が言えることではありませんが」

ふっと少女は洋介に小さく笑いかけた。麦わら帽子で口元しか見えないが、控えめな笑みであることは直ぐに分かった。彼女の声は小さく、聞こえないところもあったが、深追いするのは止めておこう。あまり人のことをむやみに探索するのは好ましくない。そう彼が考え出したところで、

「あの……」

突然、少女が話題を切り出してきた。

「はい、どうしました？」

「……私となんか話していて、つまらなくないのですか？」

首を傾げ、少し不思議そうに少女は洋介を見詰める。その声には自身を自虐するような意味合いも含んでいるのだろうと、彼は直ぐに感じ取ることが出来た。

単純な疑問。けれど、少女にとっては単純ではない一言。

洋介は、ふっと笑いかけて少女に言った。

「……つまらなくなんかないですよ。それに、私も一人ではいささか退屈だと思っていたところでしたから」

実際に、彼女といて、つまらないというわけでもない。むしろ一人でいるより落ち着いて良かったと彼自身も思っている。

独り言の多い洋介にとって、話し相手がいることは苦ではないからだ。

「では……少しだけ、よろしいですか？　お連れしたいところが、あるのです」

「場所？　それは一体どちらに……」

「私について頂ければ分かりますので。さあ、手を」

小さな少女の手が洋介に差し向けられる。彼は不思議に思いながら、少女の手を握った。触っただけでも冷やりとした、小さな手だった。

「あ、それから――」

何かを思い出したように少女は立ち止まる。そのまま洋介の方に振り向いて、

「無理して敬語を使わなくても結構ですよ？」

悪戯っぽく笑った。

◇

「これは……」

「綺麗でしょう？　この場所は、私以外に誰も知らないのです」

少女と手を繋いでやってきた場所は、向日葵畑に入って少し上った先にある、小さなスペースだった。二、三人程度人間の身体が入る空間しかなく、四方が向日葵に囲まれて息苦しい感じもするところだったが、そんな洋介の思いは直ぐに吹き飛んでいった。

前方にある小さな穴（おそらく自然に空いたものだろう）を覗けば、見えてくる様々な景観。上を見れば真っ青に透き通った空の色。周りを見れば、綺麗に咲き誇った向日葵の花。まさしくこの場所は、景色を眺めるための穴場と言っても過言ではなかった。

「凄い。この向日葵畑にこんな場所があったとは……」

「ふふっ。やっぱり、驚かれました？」

「私も昔からこの地に住んでいたけど……とんだ盲点を突かれた。いやはや、感嘆の声しか出ないよ」

洋介も、此処は全て知り尽くしているつもりだった。小さい頃からこの辺りを縦横無尽に駆け巡り、この土地を身体で把握したつもりだった。けれど少女が言うように、この場所は彼女以外に知らない。彼女だけが見つけた、小さく、しかし綺麗としか言いようのない場所だった。

少女が満足そうに微笑んでいるのを見て、洋介もつられて微笑んだ。失礼、と言いながら腰を屈め、穴を覗き込む。少女も隣に座って洋介と同様に穴を覗いたが……少しだけ見えた顔の表情は、先ほどまで笑っていた様子と違い、何処か憂いがさしていた。やがて、少女は小さな声でぽつりと語りだす。その声は、少しだけ震えていた。

「……文明だけは、いつまでも進歩していくのですね。人々を支えてきた植物たちを忘れ、私利私欲のためだけに次々と森を壊し、植物の命を奪っていく。その成れの果てがこの街並みだと思うと……悲しくもあり、憎くもあります」

「……？」

「あなたはどう思いますか。この街並みを見て。綺麗だと思いますか？　美しいと思いますか？　確かに、表面上は美しいかもしれません。でも、裏面上に見れば、たくさんの植物の死によって生まれた、偽りの美しさなのです。この景観を作り出すために、何処か遠い場所で森たちが犠牲になり、嘆き悲しんでいる姿が私には見えてしまうのです。でも、人間は見ようとしない。見えているはずなのに、自ら視線を逸らし、気にも留めようとしない。それが、自分たちの生活を蝕んでいるとは知らずに」

少女は立ち上がり、四方に囲まれた向日葵の花を愛しそうに撫でた。向日葵は少女に触れられ、まるで動物の様にその身を揺らしていた。

「この向日葵たちも時が経てば、いつかは枯れてしまう。だけど、次の生命へと繋げるために彼らはたくさん、たくさん種を残す。それは人間の世界でも変わらない、大切な“営み”でもあります。植物だって生きています。人間と同じように生きているんです。ただ……“痛い”“苦しい”って言葉を、人間のように訴えることが出来ないだけ。その感情を人間が真摯に受け止めてくれれば、環境破壊だって起きないのに」

饒舌に喋りだした少女は向日葵を撫でていた手を止め、洋介の方へと向き直った。彼はまだ、彼女の様子に呆気に取られていた。これほどまで植物を、自然を愛し、本当の美しさを求めている彼女に。何かを伝えようとしても、洋介の口から漏れてくるのはくぐもって呻くような声だけ。何かを頭の中で考えても、いざ喋ろうとすればふっと消えてしまうもどかしさ。はっきりとしない自分自身に嫌気がさしつつあった洋介に向けて、少女は不思議そうに首を傾げ、にこりと笑った。

「いいんです。あなたを責めているわけじゃないんですよ。私はただ、思ったことを口に出して独り言を呟いただけですから。今更私が言ったとしても、変わるはずもないでしょうから……」

「……全ての人間が、そうだとは限らないよ」

「えっ？」

少女は洋介に聞き返した。

「少なくとも、私は植物の命を自分勝手な欲望で奪うことは専ら反対だしね。この地球で生きている限りは、植物だって人間と同じ『生物』だから、地球を保つために生きている植物を殺していいはずがない。単純なことしか言えないけど……それでも私は植物が好きだし、向日葵が、好きだから」

いつだっただろうか。洋介は子どもの頃、大切に育てていたアサガオのことを思い出した。毎日毎日欠かさず水をやり、世話をし続けた結果、綺麗な青紫色の花を咲かせることが出来た。しかし、その翌日、散歩に行く途中だった犬の目を離し、鉢植えを引っくり返され、アサガオは原型を留めないくらい無残な姿となった。それを見て、彼は声が出なくなるくらい泣いた。今まで愛情を込めて大切に育てたアサガオはもういない。くしゃくしゃに千切れた青紫色の花の一部を握り締め、彼は一日中泣き続けた。それくらい洋介はアサガオを愛していた。

そういうものだ。花であろうと生き物には変わりない。愛情を注いだ分だけ花は美しく開く。愛情を注いでもらった分だけ、花は綺麗に咲こうとしてくれる。

健気で、純粋に。

「……あなたは優しいんですね」

洋介の隣に腰を下ろしたかと思ったら、直ぐに少女は立ち上がり、向日葵畑の前へと立った。大きな向日葵は、まるで彼女の守り神のように見えた。

「あ、名前を聞いていなかったね」

そういえば、二人とも名前を聞いていなかった。彼女の名前を聞いたら自分も同じように名乗ろう。苦笑しながら、洋介はそう思った。

「そうですね。私の名前は――」

大きな麦わら帽子に手をかけて、少女が顔を見せる。

その少女の顔を、洋介は何処かで見た覚えがあった。

◇

洋介は休憩所のテーブルにうつ伏せたまま、ふっと目が覚めた。きょろきょろと周りを確認しても、少女の姿はどこにも見えない。休憩所からそっと顔を覗かせても、そこには夕暮れに変わりつつあった空と向日葵畑があるだけで、印象強い白のワンピースを着た女の子の姿は、そこにはなかった。

「夢、だったのか……」

独り言を呟いているうちに、いつの間にか眠ってしまったのだろうか。それにしても、いくら日陰だとはいえ、こんな熱帯のような場所で熟睡するとは自分でも驚きだった。リュックサックをテーブルに置いたまま寝るのは迂闊だった。中には金品がいくつか入っている。人通りが少ないとはいえ、用心に越したことはない。

中を確認し、何も盗まれていないことにほっと一息つく。次からは気をつけなければ。田舎だから良かったものの、もし都会だったらひとたまりもない。

リュックサックを背に掛け、洋介は休憩所を出ると、山道を登るために足を一歩前に進ませようとして――ふと思いとどまった。休憩所の直ぐ近くに、一輪だけ向日葵が咲いているのに気付いたからだ。

「向日葵……？　何でこんなところに……」

腰を屈め、まじまじとそれを見詰める。見詰めて考えているうちに……ある結論に辿り着いて洋介は笑いが漏れた。それはとても不可思議で、現実ではありえない結論。もちろん彼もそれを信じているつもりはなかったが、出来れば、そうであってほしいと願っていた。

「それじゃあ、行ってくるよ」

一輪だけ咲き誇る向日葵に一言だけ呟き、立ち上がって向日葵を後にした。まだ先は長い。夜にならないうちに着かないと。そう思い、少し駆け足で山道を登っていこうとした瞬間、

『行ってらっしゃい』

ふと耳元で声が聞こえた。洋介は直ぐに後ろを振り返ったが、後ろには誰もいない。いたとしても、そこには先ほど別れを告げた向日葵だけだった。

洋介は、何も言わず向日葵に向けて微笑んだ。今、彼が作ることの出来る、最高の笑顔で。

向日葵もまた、彼に向けて笑い返し、何も言わず、ただずっと洋介を微笑んでいるように見ている……。

ただ、そんな気がした。

Fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7475h/

向日葵の声

2011年10月9日20時14分発行